



## ロバート・ヘンリソン 『短詩集』 その二 (Robert Henryson : The Short Poems 2)

著者	西納 春雄, 安藤 光史
雑誌名	言語文化
巻	1
号	2
ページ	413-433
発行年	1998-12-31
権利	同志社大学言語文化学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004301">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000004301</a>

## ロバート・ヘンリスン『短詩集』その二

西 納 春 雄 訳  
安 藤 光 史

### 序

「『短詩集』その二」と題した本翻訳は、『言語文化』第1巻第1号に掲載した「『短詩集』その一」につづくもので、この二編でロバート・ヘンリスンの『短詩集』のすべての翻訳が完成することになる。このたびの翻訳に含まれる作品は、「<老齡>と<青春>との対話」(*The Ressoning betuix Aige and Yowth*)、「<死>と<人間>との対話」(*The Ressoning betuix Deth and Man*)、「ロビンとマーキン」(*Robene and Makyne*)、「医術の実践」(*Sum Practysis of Medecyne*)、「三つの髑髏」(*The Thre Deid Pollis*)、である。全て本邦初訳となる。ヘンリスンの短詩の特色、使用したテキストや翻訳の方法に関しては、「その一」の「序」をご参照いただきたい。

### <老齡>と<青春>との対話<sup>1</sup>

#### <青春>

うるわしきフローラ、花の女神が  
森と野の装いを新たにし、  
かぐわしい真珠の雨粒が

<sup>1</sup>「言語文化」1-2：413 - 433ページ 1998.  
同志社大学言語文化学会 © 西納春雄 / 安藤光史

緑の森に湿りを与えた朝

一人で散策していた私は、陽気な男に出会った。

5

愉快的ことなら何でも大歓迎、

優雅に口ずさむ歌に言うようは、

「おお、青春よ、みずみずしい花の時代を謳歌せよ」

< 老 齡 >

私が少し彼方に目をやると、

老いさらばえた男が、杖にすがってやって来る。

10

頬はこけ、髪は白く、

目は落ちくぼみ、声はしわがれせき込んで、

やつれ果て、衰弱した様はまるで枯れ枝のよう、

男は胸に書き付けを下げていた。

誤りのない文字で、以下の文句がかいてある。

15

「おお、青春よ、汝の色香はじき失せる。」

< 青 春 >

若者は、たいそう軽やかに飛び跳ねて、

老人の意見に、さも驚いた様子。

「僕の軀軀（からだ）はしなやかで、力も強い、

筋肉は熊のよう、胸板は厚くて広い。

20

誰もこの体を損なうことはできないし、

僕の力をほんのわずかでも削ぐこともできない。

僕の顔は美しく、容姿は衰えを知らない。

おお、青春よ、みずみずしい花の時代を謳歌せよ。」

## &lt;老齡&gt;

この老人は歌った、沈んだ声で、  
髭をふるわせながら。曰く、「お若いの、おやめなさい。  
このわしは、67が歳（とせ）のうちには、  
剛胆で、力強く、気っ風のいい男だったこともあった、  
お前さんのように、陽気で快活で若く、はつらつとして。  
しかし今となっては、それも過ぎし日のこと。  
この醜悪な姿を見て、私の言葉の真偽を知るがよい。  
おお、青春よ、汝の色香はじき失せる。」

## &lt;青春&gt;

この若者は、もう一つ歌を歌った。  
「愛の掟に従って、しばし楽しく暮らそう。  
宮廷では、身なりを整え、上手に跳ねて、  
きれいでかわいい女たちを眺めよう。  
誰も知らない秘密の場所で  
結婚話でうまく仕掛けて、あの子をモノにしたりして、  
そんな具合に小鳥さんたちと楽しく憂さを慰めよう。  
おお、青春よ、みずみずしい花の時代を謳歌せよ。」

## &lt;老齡&gt;

このいかつい老人は、怒って応えた、  
「跳ね回れば、足がねじれて曲がるだろう、  
その肉欲も費えよう、  
痛みで性欲も失うことだろう。  
そなた、男の力が、月が欠けるように衰えたときには、

寢室で歓びを交える女とてなくなろう。  
 この歌の苦みもやがて自ずと知れよう。  
 おお、青春よ、汝の色香はじき失せる。」

< 青春 >

この陽気な若者は、さらに快樂について語った。  
 「この体は病知らず、完璧さ、  
 健康そのもの、病気もなければ怪我もない。  
 五感はうまく調和して、  
 気分も快適、最高さ。  
 心臓だって、肝臓だって、脾臓だって健康さ。  
 だからこの書きつけを勧めるのもわけありさ、  
 おお、青春よ、みずみずしいお前の花を謳歌せよ。」

< 老 齡 >

灰色の髪をふるわせて、老人は美青年に言った、  
 「お前さんは、いつか必ずこのわしの書きつけに従うことになるろう。  
 お前の体調も体力も、今でこそ強靱そのものだが、  
 恐ろしい熱病と寄る年波が、お前をうち負かすだろう。  
 お前の健康も、ぐらついて、すぐに損なわれる。  
 肉体は衰え、気力も萎える。  
 お前の五感も、どんなにしたって、鈍ってしまう。  
 おお、青春よ、汝の色香はじき失せる。」

< 青春 >

この洒落者は、ぶつぶつ不平を言うと、怒り出し、  
 そして腹を立てて行ってしまった。

瘦せた老人は、にこりともせず、いとまを告げた。

私は、緑の木陰で一息入れた。

書きつけの真意を読みとったとき、

私は、なるほど、両者の意見はかみ合わぬと悟った。

70

「おお、青春よ、みずみずしいお前の花を謳歌せよ。」

「おお、青春よ、汝の色香はじき失せる。」

### <死> と <人間> との対話<sup>2</sup>

#### <死>

おお、はかなき人間よ、そら、わしの方を見よ、

昼も夜もわしをおまえの鑑（かがみ）とせよ。

すべてこの世に生を受けたものは死なねばならぬ。

教皇、皇帝、国王、貴族、騎士とて皆同様、

たとえどんなに高貴な身分であろうとも、

5

わしがこの槍を投げる時には、抗（あらが）えぬ。

どんなに堅固な城壁も、城も、塔も

役には立たず、槍はそやつの心臓を貫く。

#### <人間>

さても、お前はいったい何者か、この俺にこちらを見るだの、

昼も夜も鑑とせよだのと命じるお前は、

10

また、その槍で俺を痛い目にあわそうとするお前は？

お前の言うことはまったく、でまかせに違いない。

いったいどこの誰が大胆にも、この俺をおどかして、

徒歩（かち）や騎馬で俺と戦おうというのか？

この国にどれほどの剛の者がいても、  
必ずこの俺が力づくでこの前にひれ伏させてやる。

15

## &lt; 死 &gt;

わしの名はな、それほどお前が尋ねるからには、  
はっきりと言ってやるが、人はみなわしを死と呼ぶのだ。  
わしは男も女もみな棺桶に送りこめる、  
時を選ばず、所を選ばず、意のままに。  
どんなに強く、盛んで、美しかろうと、  
老いも若きも、富めるも貧しきも、同じこと。  
人はみな、わしの行くところ、遅かれ早かれ、  
否応なくわしに身を預けねばならぬ。

20

## &lt; 人間 &gt;

さても自然がかくのごとくめぐり、老いも若きも、  
富めるも貧しきも、みな死すべきものだと、  
ああ、若き時分にはなんと無分別であったことが。  
自らを導くように、身を律して善をなし、  
悪行から逃れるべく注意を払ったこととてなかった。  
青春はわれとともにあると信じ込んで、  
常日頃からの放埒三昧、  
大罪、わけても傲慢の罪を犯していた。

25

30

## &lt; 死 &gt;

だから悔い改めよ、悔恨をもって汝の良心を見つめ、  
今からわしがそなたに話す言葉を斟酌せよ。  
おお、無知蒙昧の哀れな男、

35

お前の快樂を高価に贖え。

さあ、決心して、急ぎわしと来るがよい、

毒蛇や、イモリや、蛆虫の餌になるのだ。

わしが呼んだら来るのだ、お前にはわしを拒否することはできぬ。

たとえお前が教皇や皇帝や国王のすべてを兼ねていたとしても。

40

<人間>

されば私はお前から逃げられぬゆえ、

この惨めな世の中を、今ここで私は捨てて、

死よ、お前のもとへ、お前の外套の下に包まれて行こう。

私はこの身を、心底謙虚な心で捧げよう。

私の敵、悪魔が私の魂を襲う

45

力を持たぬようにと、神に祈りつつ。

イエズス様、どうかお願いですから、

裁きの日にはどうか私に憐れみをおかけくださいますように。

ロビンとマーキン<sup>3</sup>

ロビンは豊かな緑の丘に腰をおろし、

羊の群れの番をしている。

陽気なマーキンが彼に話しかけた。

「ねえ、ロビン、私のこと哀れに思ってよ。

もう2年も3年も、こんなに

5

あんたのこと、とことん愛してんだから。

あんたがこの悲しみをこっそりと和らげてくれなけりゃ、

あたし、もう死んじゃうから。」



ロビンが応えて言うには、「十字架に誓って、  
僕は愛のことなんか、なんにも知らない。 10  
僕はただあの森の中で羊の番をするだけさ。  
ほら、羊たちが一列になって行くのを見てごらんよ。  
なんでまた君はそんな気になったの。  
マーキン、僕に教えておくれ、  
愛すること、愛されることが、一体どんなことかを。 15  
喜んでその愛の掟を覚えるよ。」

「もしもあんたが愛の教えを学びたいのなら、  
まずイロハを覚えなさい。  
礼節を守り、礼儀正しく、振舞いを優雅にし、  
賢明で、勇敢で、心寛くありなさい。 20  
それは、蔑まれて傷つくことがないようにするためよ。  
どんな悲しみもひそかに耐えなさい。  
精いっぱい苦勞して、  
堪え忍び、秘密を守りなさい。」

ロビンはまた応えて言った。 25  
「僕は愛がどういうものか知らないけど、  
どうして君がふさぎ込んでるのか、  
僕には不思議でならないよ。  
天気は良くて、気分もいいし、  
羊たちも元気だ。 30  
もしも僕らがこの野原でいいことしてたら、  
あいつらが黙ってはいないぜ。」

「ねえ、ロビン、あたしのお話をよく聴いて、  
あたしの言う通りにしてくれない。  
そうしたら、あたしの心も、  
この体もすっかりあんなのものよ。  
神様はどんな悲しみにも  
嘆きにも、手をさしのべて癒（なお）して下さるものでしょ。  
もしこっそり慰めてくれないなら、  
ほんとに、あたしもう死ぬしかないわ。」

35

40

「マーキン、明日、この時刻に  
ここにおいで。  
ひょっとしたら、僕たちがいいことしてるときに、  
羊たちがそばにいるかも知れないけど。  
やつらがどっかへ行っちゃったら、  
叱られるのは僕だからね。  
心の中にあることを隠しだてするつもりはないよ。  
だから、マーキン、機嫌を直しておくれ。」

45

「ロビン、あたしつらいわ。  
ただあんなのことだけを愛しているのに。」  
「マーキン、さようなら、太陽は西に傾き、  
もう一日が終わる。」  
「ロビン、あたしこんなに悲しみいっぱい、  
愛ゆえ身の破滅ってということになりそう。」  
「お行き、マーキン、好きなところへ。  
僕には恋人なんかいないからね。」

50

55

「ロビン、あたし、こんなざまで、  
溜息がでちゃう、ああ、つらいわ。」  
「マーキン、僕はずうっとここにいるんだよ。  
ああ、早く家に帰りたい。」 60  
「愛しいロビン、お願い、もうちょっと話していて、  
もう何もしなくてもいいから。」  
「マーキンたら、誰か他の男を引っかけな、  
僕は家に帰りたいんだから。」

ロビンは家路についた。 65  
まるで木の葉のような軽い足どりで。  
マーキンは心傷つき、  
もう二度と会わないと誓った。  
ロビンは跳ぶように野を越え行ってしまった。  
マーキンは、声張り上げて泣いていた。 70  
「さあ、もっと歌うがいいわ。あたしは傷ついたわ。  
一体、愛は何という仕打ちをするの。」

マーキンはほんとうに泣き疲れて、  
家に戻ってきた。  
そのころロビンは、美しい谷間に 75  
羊をみな集めていた。  
その頃までに、マーキンの病が、  
彼の心の中でむずむずと蠢（うごめ）き出していた。  
彼は彼女を追いかけ、追いつくと、  
彼女をしっかりと見つめた。 80

「待って、待って、綺麗なマーキン、  
ぜひぜひ、ひとこと言わせておくれ。  
僕の愛なら、それは、すっかり、  
君のものだ。

君の心を独り占めするのが  
僕の望み。

あの羊たちは、明日の九時まで、  
見張る必要がないのだよ。」

85

「ロビン、あんたも、昔話にこんなふう  
歌われてる諺、聞いたことあるでしょ。

『できるときに欲せずば、  
欲するときに得ず』とね。

あたしイエズス様に毎日お祈りするわ。

林や森や野原で、

最初にあんたといいことしようっていう人の  
悲しみのいや増さんことを、ってね。」

90

95

「ねえ、マーキン、今夜は穏やか、からっとしてて、  
暖かで、雨の心配もないよ。

緑の森がすぐ近くにあって、

すぐに歩いて行ける。

そこでは陰口屋が覗き見することもない。

そんな輩は恋には大敵。

そこなら、マーキン、君と僕とが、

誰にも見られず、一緒にいられるよ。」

100

「ロビン、そういう世界はもう昔、  
すっかり終わってしまったのよ。  
あんたが思っているようには、  
誓って、二度と再び戻ることなどないわ。  
あんたってば、あたしの悲しみを小馬鹿にしちまったんだものね。  
あたしは無駄に時を過ごしたってことよ。  
あんたがしたように、あたしも言ってあげる。  
『もっと悲しみなさい、いつか立ち直れるわ。』」

「マーキン、わが幸福の礎（もと）、  
僕の心は君に向けられていて、  
この命が続く限り、  
いつだって君に忠実だ。  
どんな運命に見舞われようと、  
他の奴らみたいに、絶対に裏切ったりしない。」  
「ロビン、あんたなんかもうまっぴら。  
さようなら、あたしたち出会いもこんなふうだったわ。」

マーキンは、灰色の森を抜けて、  
ほんとに上機嫌で帰って行った。  
ロビンは泣き、マーキンは笑った。  
女は歌い、男はつらい溜息をついた。  
そんなわけで、ロビンには悲嘆と傷心が残り、  
悲しみと嘆きを心に、  
切り立った岩の下、灰色の森の中で、  
羊の群れを見張っていた。

医術の実践<sup>4</sup>

カッコウ、カッコウ。こんにちは、先生。ぼかんと口を開けて待ってるんだね。

こんな挨拶がお似合いだ。あんたの頭巾は楽しみで一杯だからね。

あんたは、よくも俺に難癖つけたな、俺が間抜けだと言って、韻文でもって俺を煙にまきおった　　が、違うんだよ、先生。十字架に誓ってね。

あんたは何やら言ってるが、そんなもの俺は相手にしやしない。　　5

みんな寄せ集めの戯言、馬鹿げた何の役にも立たぬものさ。

俺はあんたの医術とやらを吟味して、その価値のほどをちゃんと見極めたのさ。

あんたは医術のことなど全く分かつちやいない。

それでいてうまく詩文をでっちあげ、世の人達に俺が

恐怖におののいているだとか、　　10

馬鹿だ、阿呆だ、と思わせたのだ。

俺に医術の心得があるか、ないか、

いま見せてやる。

俺には分かっているが、あんたの医術は、

ぼろぼろの、つぎはぎだらけで、何の役にも立ちやしない。　　15

だから俺の施薬の術もあんた同様、貧弱で、

自分の無知と同じだとあんたは信じとる　　そんな嘘っぱちをならべる輩に  
災いあれ。

俺が診ればたちどころ、熱も下痢も

不快も痛みも消え失せる。  
 足の萎えも怪我也治してしんぜよう。 20  
 膏薬を塗ってすっかりもと通りに。  
 あんたに送るこの処方箋が信頼できるように、  
 信用できる薬屋どもの手を借りて  
 万病を治す  
 処方と薬で 25  
 あんたの病を治してやろう。

ディア・クルカキト<sup>5</sup>

ひられた糞を採れ、ヤナギタデの葉を摘め、  
 胃の薬、もしそれを処方するならば。  
 それに加えて葡萄酒の澱とスイバ、それにセージの汁を使う。  
 お前の歯で噛み砕いた俺の糞、 30  
 月桂樹と亜麻仁と芹も。  
 腫れをひかせるには、半分に折れていない  
 ハリネズミの針とアザラシの鼻。  
 こういう処方を我が医術ではディア・クルカキトと呼ぶ。  
 ここにあげた薬種をみな鍋に入れ、胡椒と松脂を加え、 35  
 かてて加えて  
 雌牛の隠し所に接吻してみる。  
 俺の知る限り、仙痛の  
 これほどの妙薬はない。

## ディア・ロングム

紅鴉を三度ひっ掴め。 40  
 灰色の雌馬のあくび、鷺鳥のガーガー叫び声、

雄鴨のペニスを少々、家鴨の潜水、  
緑鳩の胆汁、風の足、  
蠅の羽根を五オンス、鯨の鱗、  
泥沼に育った食藻を袖一杯、  
三日月の晩に、こういう薬種を混ぜ合わせる。  
この膏薬はあんた自身が使うのにぴったりだ。  
あんたが、うとうと、こっくりこっくりしたい時、  
すえた小便にひたして、紅棘草の種で、  
あんたの陰囊（ふくろ）を洗ってみな<sup>6</sup>。  
あんたを眠りに誘うのに  
これほど優れた処方はない。

## ディア・グラコニコン

この処方はとても高価につくが、そこそこ秀逸だ。  
何故なら常に薬効が期待できるからだ。したがって、つぎなる薬種を入手す  
べし。  
アザラシの七回の嘔り泣き、それに鯨の潮吹き、  
ツタノハ貝の耳はまず欠かせない。  
鱈の脳味噌、ぶつ切りか、まるごと、  
それに雌蝙蝠の生き血を壺一杯、  
以上を温めたキャベツの一杯はいった醸造釜に入れる。  
というのはそれで味がまるやかで甘くなるからだ。  
こんな処方はロウディアンからルンディンまで他にはない。  
我が医学書では名付けて  
ディア・グラコニコンという処方。  
患者のいる所、  
その愚を蹴散らさん<sup>7</sup>。



## ディア・クストルム

四番目の処方とはびきり上等、ひどく値が張る。  
 声の潤れや咳、胸の熱によく効く。  
 つぎなる薬種を準備されたし。スプーン三杯の黒胡椒、  
 それに郭公の屁を二掴み、  
 獅子の耳、子豚のブーブー鳴く声、 70  
 牡蠣の胃袋の下部を一オンス、  
 それに乳母の糞を塗りたくる。それがとても効くのだ。  
 さらにマスタードと鼠の糞を加えて混ぜ合わせる。  
 この薬にさらに特別加えるとよいのは、高価になるが、  
 穴熊の睾丸二つ、 75  
 それに雄鳥の爪三つ。  
 クリスマスツリーの影  
 それが咳にはよく効く。

おやすみ、カッコウ、カッコウ。はじめのあいさつもこうだったな。  
 もうこんな時間か、長居しちまった。 80  
 この書き付けをよく読んで、しっかり勉強しな、  
 この施薬の方法と要点を。  
 先生よ、夕刻この薬を誰でもいいから飲ませてみな、  
 そうすりゃ、我が薬効をかけてもいい、翌朝の一課時<sup>8</sup>が過ぎないうちに、  
 病人はあんたを賛美するだろう、さもなきゃ呪うだろうよ。 85  
 というのもこの薬が病人をまこと幻覚から救うからさ。  
 しかし、あんたがこれらの薬種、薬草を採取するときは、  
 その味が甘いか酸っぱいか、  
 時刻が適切か気をつけな。

他人の尻こそ

90

暗黒の鏡。<sup>9</sup>

### 三つの髑髏（どくろ）<sup>10</sup>

おお、罪深き者よ、悲しみと不安の谷間、

この死の海を覗き込み、

恐怖をもって、我ら三人の髑髏（どくろ）を見よ。

抉（えぐ）られた目、肉も皮も削がれた剥きだしの髑髏を。

今のお前と同様に、かつて我らもこの世にあって、

5

見目にも瑞々しく、麗しく、陽気だった。

男よ、お前もこのような己の真実の姿を

目にすれば、本当の恐れを知るだろう。

死すべき者がすべて、命を奪いとる

死を受け入れ、果てるのは当たり前のこと。

10

この世の繁栄が死に勝ることはありえない。

死すべき刻（とき）も場所も定かではない。

それを執り行う権限は独り高き御座（みくら）なる神にあるからだ。

だから死を心せよ。死すべきことを。

日々このような嘆かわしい姿を目にすれば、

15

誰もが邪な悪徳から逃れるはず。

おお血気盛んな青年よ、陽気な五月のように瑞々しい、

赤や白に咲き出した花でこの上なく美しい五月のような。

おお若く陽気な青年よ、我々の髑髏を見よ。

お前の若々しいその顔もついにはこうして醜く横たわる。 20  
抉られ、空ろになって、草のように枯れて。  
お前のカールした髪、それに水晶の目も、  
やがてつらい無残な死に終わる。  
我々の姿に、お前の行く末が見えるのだ。

おお白き肌の乙女達よ、真珠や数多の宝石を 25  
あしらった眩く輝く衣を着て、  
真白き乳房、黄金とサファイアで  
飾りたてた優美な首の。  
数多のルビーの嵌め込まれた指輪に飾られた、  
鯨骨の如く白いお前たちの華奢な指。 30  
我々がかく横たわる如く、お前達もみなこうなるのだ。  
肉も皮も削がれた髑髏、こんなに空ろな曝れ首（されこうべ）になって。

おお我儘勝手な傲慢、すべての苦悩の源よ、  
謙虚な心もて我らの髑髏を思え。  
男よ、お前の過ちに対し、謙遜な心で慈悲を請え。 35  
何人たりと死に抗うことはできぬのだから。  
いかに優れた資質に恵まれようと、  
権勢を誇る皇帝も、国王も女王も、地上のいかなる身分の者も、  
貧しき者も富める者も、異なるところ無く、  
かくの如くみな土に還るのだ。 40

さて、つぎなる問いに誰が答えられるか、  
骨相学者よ、手相見よ。  
我々三人のうち誰がもっとも美しく、また醜くあったか。

あるいは我々三人のうちいずれの血筋が高貴であったか。

また誰が、科学、学問、芸術、

45

音楽、天文学にもっとも秀でていたのか。

お前の関心も棲家もなおこの世にあるが、

このようにお前の頭も横たわることを考えよ。

おお衰弱した年寄りよ、与えられた日々を全うしつつ、

絶えず悲しい死の日が刻一刻と迫って来ている。

50

我らが曝れ首を見よ、悲しみと後悔の気持ちで。

跪いて、神に恵みを請い、さめざめと泣くのだ。

祈りと甘美な賛美歌で

神にご慈悲を願うのだ。

神の裁きに従いつつ、我らの魂に

55

憐れみと栄光とを賜るように請い願うのだ。

我々はまた忠告する。すべての生身の人間は、

無から万物を創造されたお方のために、

一人残らず、天と地の王であらせられる

イエズス・キリストにご慈悲を求めて、泣き、祈るように。

60

汝らの祈りを通じて、天の父、

その御子イエズス・キリスト、精霊とともに

我々も汝らも永遠に、栄えるのだ。

三者は全き結合によって一つに結ばれているのだから。

## 訳注

- 1 老齡と青春が議論する主題を持つ詩は、いわゆるdebate poemsとして、中世文学の伝統の一つであった。
- 2 死と人間の議論を扱った中世英詩は多くない。擬人化された死が人間にこの世のはかなさを警告するというこの詩の主題、および死と人間との交互に交わされる対話は、後掲の*The Thre Deid Pollis*と同様に、図像表現の「死の舞踏」(Dance of Death)が詩形式をとったものと言えよう。
- 3 *Robene and Makyne*は明らかにフランス中世の田園詩*pastourelles*の伝統を受け継ぐ詩である。*pastourelles*は、イギリスに移入されると、フランス詩の持っていた、すでに恋人を持つ牧女に騎士が言い寄るといった主題が変化した。スコットランドではDunbarの詩に見るように、猥雑性を伴う表現が人気を得たが、その中で、ヘンリスンのこの一編は、羊飼いと土の恋愛を扱いながらも主題を優雅に展開することに成功している唯一の例であろう。Makyneの名は、Malkyne, Mawkyne, Matildaなどとしても現れ、通常、多情な田舎娘としての性格を付与されている。Cf. Denton Fox, *The Poems of Robert Henryson*. (Oxford: The Clarendon Press, 1981), p. 471.
- 4 この詩は、ヘンリスンの作品の中でも、もっとも難解なものの一つである。medical burlesqueの形式を取り、ヘンリスンの他の詩には見られない口語的な表現を多用している。明らかに対決すべき相手を想定して書かれているが、その相手が誰であるかは明らかにされない。authorshipが疑われる詩の一つである。
- 5 dia-という接頭辞は、薬の製法に用いられて、‘made of’, ‘consisting of’の意味であった。Cf. *Oxford English Dictionary*, dia- pref.2. 翻訳すれば「薬」「処方」となるであろうが、この詩の場合それに続く語がほとんど意味不明であるので、あえて原語の読みを表すにとどめた。Foxは、dia culcakitを、‘befouled-buttock drug’と解釈している。
- 6 この塗薬の方法は、明らかに媚薬のそれである。前行の*nettle seid*は、強い性的興奮作用がある媚薬として知られていた。詩の内容から逆推して、この処方*longum*を、興奮状態の男性器への言及として考えることも可能である。Cf. Fox, p. 482.
- 7 この部分は、旧約聖書『箴言』27:22の「無知な者を臼に入れて穀物と共に杵でついても無知は彼を去らない」(新共同訳)をふまえている。
- 8 カトリックの一日7回の聖務日課時の一つ。午前6時ないしは日の出時刻。

- 9 この部分は、古くからある諺“A mirk mirror is a man’s mind”のもじり。糞便を検査して健康状態を調べる診断法に言及している。Cf. Morris P. Tilley, *A Dictionary of the Proverbs in England in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1950), M 35.
- 10 「三人の死者と三人の生者」は、*memento mori*の思想を反映したDance of Deathの主題として、詩よりも絵画や彫刻などの視覚芸術において頻繁に取り上げられた。Cf. Rosemary Woolf, *The English Religious Lyrics in the Middle Ages*. (Oxford: Clarendon Press, 1968), pp. 312-22, 401-4, also, Douglas Gray, *Themes and Images in the Medieval English Religious Lyric*. (London: Routledge and Kegan Paul, 1972), pp. 176-220.

( 共訳者の安藤光史氏は、愛知工業大学助教授 )